

2026年度 大学入学共通テスト の出題傾向

河合塾グループ 株式会社 KIES 地歴・公民科

1 はじめに

2026 年度大学入学共通テスト（以下、共通テスト）は、新課程移行 2 年目の実施となり、難易度の変化に注目が集まっていたが、全体として昨年より難化した。また、昨年設けられていた旧課程の経過措置がなくなり、新課程のみでの初めての実施となった。今回も知識・技能を活用した、思考力・判断力を問う問題が多く、「日常を意識した場面設定」「複数資料の提示」といった共通テスト特有の出題傾向が継続している。

2 2026 年度共通テストの出題傾向

「地理総合、地理探究」の第 1 問・第 2 問は「地理総合」第 1 問・第 2 問との共通問題であった。問題は「地理総合、地理探究」のほぼ全分野から満遍なく構成されていた。昨年に続き、図表などの資料が多く扱われたが、昨年と比べると判断に迷う設問が少なくなり、基礎的な知識をもとに丁寧に読み取れば解ける設問が多かった。地誌分野では、ドナウ川などの各河川流域に関する地誌が出題され、個別地域の総合地誌ではなく、河川流域の特徴の差異に焦点をあてた問題であった。今後も、全体として問題文や図表の量が多く、1 設問あたりの統計地図やグラフも多くなることが考えられるため、いち早く題意を理解する力が求められる。

「歴史総合、日本史探究」の第 1 問は「歴史総合」第 1 問との共通問題、第 2 ～ 6 問は「日本史探究」からの出題であった。昨年と同様、資料を用いて歴史的事象を多面的に考察させる問題が多かった。「歴史総合」では、今年も日本史の知識だけでは対応できない問題が複数出題されたが、難易度は昨年並みであった。テーマは「近代化」「大衆化」「グローバル化」からバランスよく出題された。知識の暗記そのものを問うのではなく、身に付けた知識を活用して、資料を多面的に考察する力が重視される出題であることは改めて確認し、対策をしたい。

「日本史探究」では、多くの受験生が苦手とする社会経済史分野の割合が低くなり、比較的取り組みやすい政治史分野の割合が高くなったため、難易度はやや易化した。今後も、世界史の近現代の重要トピックをおさえつつ、文章資料を中心に資料の読解力を高めたい。また、今年度は、解答が前問の解答と連動し正答の組み合わせが複数ある連動型形式の問題が出題された。

「歴史総合、世界史探究」の第 1 問は「歴史総合」第 2 問との共通問題、第 2 ～ 5 問は「世界史探究」からの出題であった。「歴史総合」では、昨年はなかった日本史の知識のみで判断する小問が 2 問出題された。試作問題にも同様の小問があり、今後も日本史分野の知識は習得しておきたい。「世界史探究」は、政治史・社会経済史分野からの出題が多く、特に社会経済史の問題数は大きく増加した。「歴史総合」「世界史探究」ともに、知識の質よりも高い読解力が求められ、全体としてやや難化した。また、マンガ『ベルサイユのばら』の一コマが用いられて話題となった。今後も、さまざまな資料から情報を正確に読み取る力が求められるだろう。

「公共、政治・経済」の第 1 問・第 2 問は「公共」第 1 問・第 4 問との共通問題であった。全体として、解答に必要な知識は、おおむね教科書の範囲内で対応できるものであった。「公共」では、思考力・判断力を問う出題傾向は昨年と変わらず、知識の正確さも求められた。また「政治・経済」では、2024 年の国連総会におけるパレスチナの加盟承認決議の採択という最近の出来事をふまえた問題もあり、今後も時事はおさえおきたい。全体として地歴科目同様に 40 ページ近いボリュームがあり、多くの図表や資料が用いられたが、基本知識をもとに思考力や判断力を働かせることで正解できる内容であった。また、「歴史総合、日本史探究」と同様に連動型形式の問題が出題された。各科目、こういった出題形式にも慣れておきたい。